

# 史料報

第70号

平成11年3月

## 韓国の『記録物管理法』制定とその課題

田 美 姫

私は一九九八年九月一日から四ヶ月間日本の国文学研究資料館史料館に派遣され、史料管理学を勉強する機会を得た。韓国の国史編纂委員会に勤めてからもはや十年を迎えるところだったその時期。しかし、それまで概念を把握するどころか、単語さえ聞きなれない史料管理学や記録科学やアーキビスト等々。私はその新しい学問の新鮮さにたっぷり魅了された。

いよいよ一九九八年十二月二十九日。日本での生活を終えて帰る日。飛行機の中で久しぶりに目にした韓国の新聞。そこで恰かも待っていたかのように現れた一つの記事。それは「公共機関の記録物管理に関する法律」（以下、「記録物管理法」）が通過され、西歴二〇〇〇年から実施

されるということであった。

### 『記録物管理法』の制定

一九九九年一月二十九日、一ヶ月前国会を通過した『記録物管理法』が行政自治部によって正式に公布された。これで今までもあまりにも疎かにしていた国家記録物の管理に画期的な転機となった。この法律は「国政運営の透明性や責任行政を保證し、後代に記録遺産として残すため」をその制定の理由としている。外国のどの国の記録物管理法に比べても政治的な傾向が強い。そこにはそれなりの理由がある。

一九九八年韓国は金大中大統領の就任とともに一九四八年政府樹立以降、与党から野党への初めての政権

### 目次

韓国の『記録物管理法』制定とその課題	田 美姫	(1)
受贈図書		(3)
「記録史料の情報資源化と史料管理学の体系化に関する研究」一九九八年度研究会について		(9)
		(11)
		(4)
「歴史史料の材質劣化評価への化学発光の応用研究」の研究会の開催		(5)
史料所在調査報告		(6)
平成一〇年度新収史料紹介		(8)
史料管理学研修会修了者一覧		(10)
彙報		(12)

交替が行なわれた。しかし政権を引き継ぐ際、信じられないことが発生した。一部中央の核心政府組織で前政権の失政関連の文書を大量に破棄する事態が起こったのである。

しかもこの時期は韓国がIMF（国際通貨基金）の救済金融支援を受けるなど、経済的に大変な状態にあるため、それに関わる責任者に対する問責の世論が沸騰していた時期であった。しかし大統領の統治記録をはじめ、政府記録やIMF救済金融要請決定などに関わる記録はそれが国運を左右する重大な案件にも拘らず、ほとんど残っていない。大統領はもちろん政策決定に参加したその筋の人々からも証拠として認められるような記録は提示されていなかったのである。

この過程で国家の公的記録に対する管理・保管の問題が浮かんできた。そして今まで歴代政府は一言で言えば、極めて「歴史不感症」なことを見せ

てきたことが明らかになった。しかも大統領文書の場合、在任中の公式記録物は大統領職の退任とともにその大統領や秘書官らによって私有化された。その結果、政府記録保存所には歴代大統領の一番重要な治績に関する記録さえ見つけ難い結果を呼んだのである。

このような現象が一つ一つ現れて、国家の公的記録管理上の問題解決のための努力が多角的に展開されるに至った。国家記録の体系的な生産や保存、活用体系を確立するという趣旨から「韓国国家記録研究院」が創立されたのもこの時期のことであった。この団体は一九九八年六月、社会各分野の人々及び関連学者の主導で創立され、国家記録管理学という学問分野の確立をその目的としている。最近、行政自治部より社団法人の設立認可を得て、一九九九年一月三十日に、ソウルで事務局を開設するなど、活動の継続を予告している。

一方、政府次元でのより根本的な問題解決のための動きが展開された。それはいわゆる国家の公的記録物保存に関連した法律制定の推進であった。世界先進各国の例と比べて韓国の記録保存関連の法令は不備であることは以前から学界や政府記録保存所等の政府機関によって引続き提起されてきたところだった。そこに、

当時国家記録物の任意的な破棄にまで至る羽目となった最も根本的な理由は未だに国家記録物に関する法律が定められていなかったためだ、という社会的な認識が拡大されたことであって、結局「記録物管理法」は制定されることになった。

### 「記録物管理法」の内容

「記録物管理法」に従って、韓国では二〇〇〇年から行政・司法・立法部など国家機関と広域自治団体に重要文書の長期的な保存・管理を担当する機構が造られる。又、各級公共機関には記録物保管部署が設置されることなど、全国的に体系的な記録物管理体制が備えられる。これにつき公的記録物の収集・保存体系を

概略的に観ると次のようである。まず、国家全般の記録保存政策の

樹立と核心記録の公開、不法流出記録物回収などの業務を審議・調整するため、行政自治部に国家記録物管理委員会を設置・運営させることになった。そしてその下に中央記録物管理機関、特殊記録物管理機関、地方記録物管理機関などを置き、公共機関が作り出す各種の記録物を収集する体制を整えた。

中央記録物管理機関には大統領を初め各級行政機関の記録物が収集される。二〇〇〇年から各級行政機関は関連部署を統合し、資料館・特殊資料館を造るべきである。資料館は一般行政文書、特殊資料館は統一・外交・安保・捜査分野に該当する資料物をその主要な収集対象にするが、前者は十年、後者は三十年間記録物を保管することができる。この保管期間が終わる後は例外なく全ての資料を中央記録物管理機関に移管するべきである。

一方、記録物の中で特別に重要性を持つ大統領関連資料は、中央記録物管理機関に大統領記録館を別途に設置し、管理と展示を担当するようにした。特に大統領の統治業務と関連した全ての公式・非公式記録物は任期終了六ヶ月前からここに移管するようにしたが、これは後代に歴史

的な審判を通るべきの核心記録などを徹底的に保存し公開するという趣旨からである。

行政機関とは別に、国会・法院・憲法裁判所・国家情報院・軍などは独自に特殊記録物管理機関を造ることができ。また、広域自治団体もやはり自身とその付属基礎団体の記録物を収集する地方記録物管理機関を別途に置くことができる。そして各管理機関の下級機関には資料館が設置される。

「記録物管理法」で特別に注目する所は、その間公文書に制限してきた収集・保存対象資料を会議録や非公式報告書、秘密記録、メモノートなどまで拡大したという点である。国家政策の立案段階から終結まですべての過程を事後に糾明できるようにしたためである。又、公文書を無断破棄したり国外に流出したりする場合は、七年以下の懲役又は一千万ウォン以下の罰金に処する事ができるようにして、その施行に強制力を付与して置いた。

結果的に今回に制定された「記録物管理法」により韓国は少なくとも法律的には全ての公共記録物に対する一元的で体系的な管理システムを構築できるようになったばかりでな

く、各資料館には必ず専門職員を配置するよう規定して、記録物管理のより大きな発展可能性をも開いている。

### 今後の課題

紆余曲折を経て法律は通過されたが、実際の運用にはまだまだ皆さんの課題を抱えている。もしかすると完全な施行に至るには制定までよりもっと多くの難関が待っているかもしれない。何よりもこの法律自体が持っている限界も少なくない。

「記録物管理法」によると、立法・司法部の記録は行政部のそれとは別途に特殊記録物管理機関によって運営することになっている。これはややもすれば全体的な国家記録物管理の統一性を阻害する要素となる可能性がある。しかも中央・地方・特殊記録物管理機関を統括して、国家全体の記録保存政策と記録物管理に対する基準樹立を担当する「国家記録物管理委員会」が行政自治部内に組織されるといふことも大いに憂慮されている。まだその性格や位相が定立されていない段階で、実質的な権限の行使が制限される心配があるからである。

これは公的記録物管理の中心的な役割を果たす中央記録物管理機関の実体の問題とも関わっている。おそらくそれは現在行行政自治部内の政府記録保存所がその役割を受け継ぐことになるかと推定されるところ、この場合、政府記録保存所が独立機関ではないという点が一つの限界として作用する可能性が高い。一部で関係機関を一つに統合して別途の独立的な記録保存関連機構を設けるべきだという意見が引続き提起されているのもこのためである。

「記録物管理法」が施行されるまで一年も残っていない。果してその内にこの法律が規定している組織や人員の補完と整備が出来るかも疑問である。組織と人員の後押しがない限り、この法律はまともな施行も出来ないまま死蔵されるかもしれない。しかも現在は中央政府や地方自治団体を問わず、構造調整を通じた組織減らしに力を注ぐ時期ではないか。一応可能な限り、現行の制度を最大限活用して基盤を設ける必要があると考える理由がここにある。

公的記録物の収集や保管・管理の目的は究極的には市民に対する資料の公開にあると思う。しかし韓国の「記録物管理法」にはそれに関連し

た明らかな規定を見つけ難い。まだ収集や保管もまともに行なわれていない状況にはそれは当然なことかもしれない。しかし公開についての意識のもとでだんだん法令と機構を整えていく必要性を忘れてはいけない。又、記録管理の実務を担当する専門職員の養成に対し、より深い関心と引続きの努力を注ぐべきと考えている。この人らは単純な資料の管理者ではなく、史料、究極的には歴史を作り出す人らだからである。韓国にはまだ史料管理学や記録史料学の学問的な基盤が整えられていない。幸いに最近「韓国国家記録研究院」が創立され、国家記録管理学という学問分野の確立に寄与するとしたことは喜ばしいことである。

記録物管理の体制を正しく立てるまでには乗り越えるべき難関が数え切れないほど多いであろう。しかし我々は今始めたばかりだ。「始まりがよければ半分成ったも同様」という諺もあるのではないか。そこに我々の希望がある。

### 〈附記〉

私は四ヶ月という短いと言えば短い間、日本国内の文書館関係者らに

会って、この分野に対する彼らの絶え間ない熱意と無限な可能性に接することが出来た。そのような熱意と可能性が韓国の新しい出発につながるよう願っている。そして微力であるが、そのために協力することが出来ればという夢を見ている。私に史料管理学研修会への参加を許諾して下さった高木俊輔館長と、指導教官としてたくさんの方を教えて下さった安藤正人先生、楽しい木曜日の出合い山田哲好先生、それからその他とても親切にして下さった史料館の先生方に深謝している。付け加えて今は史料館の先生らが韓国へおいでになって韓国の記録保存関連制度を習ってお帰りになる日を心待ちしている。

(韓国国史編纂委員会 編史研究士)

## 受贈図書

### 平成九年度 (二)

〔「内は寄贈者名(敬称略)ただし、省略されている場合があります。〕

大阪狭山市史編さん資料目録 8 (大阪狭山市教育委員会生涯学習部生涯学習推進課市史編さん室)

港区郷土史料目録 (大阪市港区役所総務課)

吹田市立図書館蔵書目録 (吹田市立中央図書館)

吹田市立図書館蔵書目録 (吹田市立中央図書館)

宝塚市史編纂資料目録 別冊 (宝塚市教育委員会)

姫路市史編纂資料目録集 48 (姫路市教育委員会事務局市史編纂室)

神戸市立博物館蔵品目録 考古・歴史の部 11・13 (神戸市立博物館)

神戸市立博物館蔵品目録 地図の部 11・13 (神戸市立博物館)

神戸市立博物館蔵品目録 美術の部 11・13 (神戸市立博物館)

新宮町古文書目録第九・十集 (新宮町教育委員会)

淡路文化史料館蔵史料目録 第十三集 (洲本市立淡路文化史料館)

神戸ふるさと文庫目録 (神戸市立中央図書館)

小野市史編纂資料目録 1・7 (小野市史編纂室)

護国寺文書目録 (護国寺)

奈良市古文書調査報告書 (十・十二)

(奈良市教育委員会)

帝塚山短期大学図書館蔵但馬国二方郡二日市村滝川家文書 (帝塚山短期大学図書館)

資料調査報告書 第二十三集 (鳥取県立博物館)

資料調査報告書 第二十三集 (鳥取県立博物館)

# 「記録史料の情報資源化と史料管理学の体系化に関する研究」一九九八年度研究会について

史料館では館の研究活動の中核をなすものとして、一九九六年度から「記録史料の情報資源化と史料管理学の体系化に関する研究」と題する共同研究プロジェクトを実施し、これまで二冊の「研究レポート」を公にしている。

今年度も、幸い一回の部会長会議と三回の研究会とを開催し、館外共同研究者のご協力を得て、多くの成果をあげることができた。今年度は、昨年度のメンバーのほかに、富田正弘（富山大学文学部）、伊藤泉美（横浜開港資料館）、原正一郎（国文学研究資料館）、新井浩文（埼玉県立文書館）、山領まり（山領絵画修復工房）、新田和幸（北海道教育大学）、荒井宏子（東京都写真美術館）の各氏に加わっていた。会の概要は以下の通りである。

〔部会長会議〕一九九八年一〇月二

三日

過去二年間の研究会の成果をまとめ、今後の研究計画を練るために各部会長に集まっていた。史料館員とともに協議をおこなった。まず各

システムについて

第4部会（保存と修復）

青木睦「紙史料の保存包材・材料・用具の研究―酸性紙製から中性紙製へ―」、稲葉政満「保存包材の開発と適正材料の検査について」、

二宮修治・木川りか「酸性紙封筒に付着した落下菌と大気汚染物質」

第5部会（文書館と専門職）

高橋実「史料保存の協力論（国内）」、伊藤泉美「全史料協国際交流委員会

会の活動について」

〔第2回研究会〕一九九九年二月四日～五日

第1部会（記録史料認識論）

渡辺浩一「日本近都市における文書保管と文書類型」、富善一敏

「大坂城交代時代の文書の引継と儀式について」

第2部会（評価と収集）

小風秀雅「私文書（非公文書）の評価・選別に関する体験的試論」、

戸島昭「コメント」

第3部会（整理と情報化）

横山伊徳「東大史料編纂所における電算機システムについて」

第4部会（保存と修復）

荒井宏子「写真保存用包装材料の適性試験」、青木睦「被災写真画像の緊急的応急処置の検討」、荒

井宏子「史料館所蔵『日本実業史博物館準備室旧蔵資料―写真の部』状態観察法の実習」

第5部会（文書館と専門職）

田中康雄「全史料協の活動と課題」、伊藤泉美「横浜開港資料館の海外関係事業について」

〔第3回研究会〕一九九九年三月四日～五日（第2、第4部会のみ）

第2部会（評価と収集）

戸島昭「山口県近代市町村役場文書の所在状況」、水口政次「都道府県文書の使われ方―東京都公文書館の閲覧窓口から」

第4部会（保存と修復）

新井浩文「埼玉県立文書館における劣化調査報告」、山領まり「紙に記されたさまざまな記録材料の修復処置―インク・サインペンな

どの近代以降の筆記具を中心に―」、新田和幸「近代日本における公文書の印写様式」、青木睦

「菟藪版などの記録表面のCCD顕微鏡による観察」

以上が今年度の研究会の概要である。

各研究報告の内容については、来年度発行予定の「研究レポートNo. 3」に掲載の予定である。

（安藤正人）

## 「歴史史料の材質劣化評価への 化学発光の応用研究」の研究会の開催

平成八年度から継続している科学研究費補助金（基盤研究A）の最終年度研究会を、平成一〇年一月一日に当館共同研究室で開催した。出席者は、研究分担者・史料館員で一三名である。

三年継続の最終年度であり、まずこれまでの研究・測定実験経過の概要について報告を行った。引き続き①強制劣化させた和紙試料の化学発光測定②史料館所蔵江戸幕府発給文書の化学発光測定③『手漉和紙』その他各種紙の化学発光測定、の測定実験について報告を行った。

①は、古文書を強制劣化させることができないため、代用として現代の和紙（高知産の一九九七年製造の楮紙、ソーダ灰蒸解、約60×90cm、坪量約12g/m<sup>2</sup>）を用い、a生紙（そのままの古文書を想定した物）b生紙を灰汁液に浸した紙（アルカリ化させた場合）c生紙を明礬液に浸した紙（酸性化させた場合）d生紙を木酢酸鉄液に浸した紙（酸化させた場合）の状態で、その試料を恒

温恒湿槽で温度80℃・相対湿度65% RH・12週間、湿熱劣化させた後、化学発光量を測定した結果を報告した（研究協力者吉田和成・分担者稲葉政満）。

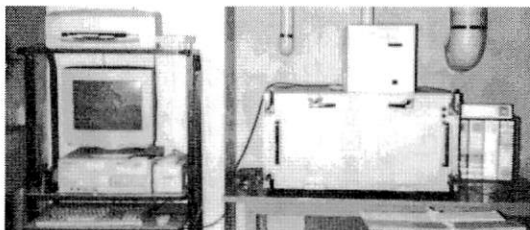
②は本研究の核となる史料館所蔵史料の測定実験報告である。始めに津軽家文書の幕府発給文書の内、同一紙質と考えられる徳川家綱から徳川家茂までの10代にわたる「朱印状・判物」の年次の違いによる化学発光量を測定した推移・傾向を報告した。次に阿波蜂須賀家文書の内「御内書」を測定対象とし、徳川家綱から徳川家斉までの7代にわたる將軍より蜂須賀家に発給されたもの各代につき一通を選び、封紙及び本紙について測定した結果を報告した。③は様々な紙質の試料（『手漉和紙』（竹尾洋紙店刊）やざら紙・コピー紙など二五種類）を用い、紙を变化させる外的要因のうちどのようなものに起因するかを把握するために光などに曝露し、時間経過によってどのような影響が生じているの

かをみた測定実験報告である。

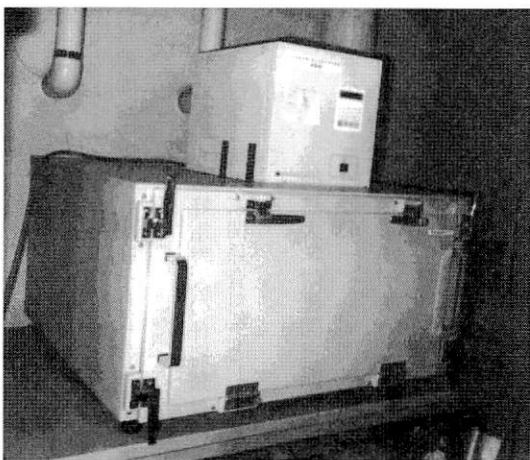
報告と討論において次のことが確認された。本研究の目的である、史料の永続的・耐久的保存を保證するため、史料的・歴史的情報を失うことなく反復的な研究利用に耐える物理的原形（記録された媒体の材質そのものを持つ物理的特性）を保持しているかどうかを評価する方法のひとつとして「化学発光法」の方式を紙質測定の世界に応用し、既存の「化学発光検出機（ケミルミネッセンスアナライザー）」を紙質測定用に改造した「史料用化学発光測定装置（写真）」を第二年に開発製造

に成功したこと。さらに、本装置による測定実験を蓄積し、化学発光法の史料・紙への応用を試みたことは、これまでにない材質劣化の測定技術を進展させたものと評価できること。ただし、その解析結果については測定データの安定性など今後の課題であると指摘をうけた。また、本研究の特色である史料学と保存科学の研究者が共同研究を行い、測定機器の研究試作開発と材質評価の解明に取り組んだことには意義が認められる。最後に、年度末に発行する報告書の骨子を提示し、了承された。

（青木 睦）



〔測定機器全景〕



〔大型の史料も収納して測定できるチェンバー（下）と化学発光検出部（上）〕

## 阿波国徳島蜂須賀家文書の関連史料

平成一〇年八月二四日から二八日、及び同一一年一月二三日から二六日の二度にわたり、青木陸・福田千鶴が阿波国徳島蜂須賀家文書に關係する史料群についての所在調査を実施した。調査対象先は、徳島県立文書館・同県立図書館・同県立博物館・同市立徳島城博物館・徳島大学付属図書館の五機関である。蜂須賀家文書の関連史料群は、専修大学図書館・東京大学史料編纂所・徳川林政史研究所・広島大学文学部国史研究室などにも収蔵が確認されているが、今回の調査では徳島県域に限定した。

今年度の調査目的は、第一に当館所蔵の蜂須賀家文書の関連史料群の所在、および徳島藩に關する史料群の最新情報を収集することにより、今後の史料所在調査の対象先ならびにマイクロ収集対象史料群の候補を選定する点にある。第二には、既刊『所蔵史料目録第四集蜂須賀家文書』の目録データベースを当館が作成するにあたって、徳島の現地各機関との相互間の密接な情報ネットワークを作り上げる協議の場を持つことである。このデータベースは、平成六

年度より開始した「収蔵史料保存のためのマイクロ化」事業の一環として、当館史料を他機関が既に文書群全体をマイクロ化したものからデュープフィルムを作成し、よりよい保存管理と利用の効率化を図るにあたり、撮影目録として作成したものである。全国に散在する当館所蔵史料の関連所在情報の収集、ならびに実用的な目録データベースを管理し、相互に利用する方法について、意見交換を行った。利用のための検索手段の現状や複製の公開利用状況についても具体的に調査した。

なお、当館には徳島関係の史料群として、「阿波国徳島賀嶋家文書」「小杉楹邨収集文書」を所蔵している。それらの関連史料群の情報収集もあわせて行った。

徳島県立文書館（徳島市八万町向寺山文化の森総合公園内） 同文書館には清陀七生氏（静岡県静岡市杵谷安南寺）寄託の蜂須賀家文書一、〇二一点が収蔵されて目録が完成しているが、複製化については未着手である。また、当館所蔵「阿波国徳島賀嶋家文書」に關わる文書である

東京都大田区在住賀嶋氏宅所蔵の文書の一部がマイクロ撮影され、文書館において調査が進められている。文書館では当館所蔵史料の内、「阿波国徳島蜂須賀家文書」一〇冊、「小杉楹邨収集文書」の一部の「徴古雑抄」（阿波一く一五）一八冊について紙焼（複製）での公開利用が行われている。

徳島県立図書館（文化の森総合公園内） 同図書館には蜂須賀家旧蔵「阿波国文庫」焼失後に収集した二〇二冊が所蔵されている。利用は紙焼（複製）での閲覧が整えられ、「徳島県立図書館所蔵阿波国古文書古記録関係マイクロフィルム目録」がある。図書館は、当館所蔵の「蜂須賀家文書」の絵図類を含むすべてをマイクロ撮影・カラー写真で収集し、その一部を開架式の郷土資料コーナーで公開している。

徳島県立博物館（文化の森総合公園内） 同博物館には徳島藩土飯沼家文書一〇点とともに、蜂須賀家に關係する「蜂須賀家実記」等の収集資料四三点が収蔵されている。

徳島市立徳島城博物館（徳島市徳島町城内一の八） 同博物館では、旧徳島藩主蜂須賀家文書約二〇〇〇点の寄託を受けている。現在は仮整

理の段階であるが、当館所蔵蜂須賀家文書と同一出所と見られる史料群である。主な内容は絵図・地図類であり、現在それらの内容調査が進められている。また、近代になってからの蜂須賀家の什器類は、「近代蜂須賀家関係資料」として寄贈を受けている。

徳島大学附属図書館（徳島市南常三町二の一） 同図書館では、徳島藩関係の史料群として「蜂須賀家臣成立書並系図」一、八〇二点、「古地図・絵図」二〇一点を所蔵している。いずれも、徳島藩主蜂須賀家の旧蔵になるもので、後者には「阿波国大絵図」（元禄）、伊能図などが含まれている。これらの資料は同図書館のホームページで公開され、絵図六点についてはマルチメディア・ブラウザのパソコンで一五〇MBの超高精度画像での閲覧が可能な利用体制が整えられている。現在、伊能図などもマルチメディアでの公開を準備中であり、教育活動の中で活用が積極的に進められている。

（青木 陸・福田千鶴）



## 信濃国高井郡東江部村山田家文書

一九九八(平成一〇)年一〇月一日から一八日までの六日間、長野

県中野市の山田頭五氏宅(中野市江部四六番地)において、山田家文書の調査を実施した。参加者は、山田正子氏、中野市歴史民俗資料館長徳永泰男氏、中野市立図書館長海谷照氏、および当館から安藤正人、山崎圭の計五名であった。この他に、山田頭五氏、山田彰一氏ははじめ山田家の皆様、中野市教育委員会より多大な御助力を頂いた。

山田家の当主は通名を庄左衛門といい、一九世紀初頭時点で二一か村にわたり七五〇石余を所持した地主である。同家は、頼山陽と親交のあった学者山田松齋を輩出したこと、郡中取締役を勤めるなど中野代官所と深い関わりをもっていたこと、明治期に長野県下最大の地主・多額納税者筆頭となり貴族院議員もつとめたこと、などで知られている。詳しくは『史料館収蔵史料総覧』の記事(二八〇番、信濃国高井郡東江部村山田家文書)を参照いただきたい。なお中野市教育委員会発行『山田家のあらまし』(一九九八年)に文献

リスト・略年譜を添えた詳細な説明がある。

史料館では一九五七(昭和三二)年に山田家文書のうち八九五点および五括・一五箱について原蔵者の山田家より譲渡を受けており、これについては館内で現在整理を進めているところである。今年度の調査では山田家文書のうち史料館に移管されず現地にそのまま残された分の状況を確認し、容器ごとの概要記録を行うことを目的とした。

最初に屋敷図(明治)および土蔵群平面図(現在)を見せていただき、それをもとに文書の収蔵状況を確認した。山田家では、本宅については建て替えを経ているものの、蔵や門などについては幕末・明治のものが今もなお多く残されている。そのうち文書が収蔵されているのは質蔵、文庫蔵、二間蔵(通称)、の三つである。容器の数で各蔵の収蔵量を概観すると、質蔵一階に二、同二階に二、文庫蔵一階に一、同二階に一、二間蔵一階に一二、同二階に六、あわせて五八の容器に入った文書が現存している(風呂敷包・紙包も容

器の一つに数えた)。

これらの文書について各室ごとに配置状況を写真・スケッチなどによって記録した後、各容器ごとに概要調査および聞き取りを行った。そこでの成果の一部を述べておくと、まず山田(庄左衛門)家文書中には、同家の外で作成された文書群として山田理右衛門家文書と千曲川堀割関係文書が混入していることが明らかである。前者は分家の一つが明治末年に千葉へ移住した際に売却したもので、本家では古書店からその一部を購入している(長野県立歴史館もその一部を所蔵)。後者は一八九七(明治三〇)年に千曲川水利組合より同家に永久寄託を受けたものである。この二つを除いた文書が狭義の山田家文書ということになる。その主なものについて見ると、家、村役人、戸長、地主、商社、貴族院議員、平野村信用組合、江部合名会社、などをとりあえず列挙することができ

る。内容に関わる分析は史料館収蔵分も含めた今後の調査をまつよりほかないが、山田家文書を用いた先行研究は地主経営の面を重点的に解明してきたので、今後はその他の側面をもあわせて検討し議論をよりいっそう豊富化していくことが必要であ

ろう。

以上に述べた史料以外に重要なものとして筆筒などの家具や什器も数多く残されているが、前者については小泉和子氏による写真付目録があり、後者については家族総出で作成されたという目録がある。これらの調査とも連携していく必要がある。ほかに掛軸や蔵書なども多数残されておりこれも貴重である。

今後の課題としては、①歴史学・史料学・建築史学・民具学などの知見を動員して総合的な調査を行うこと、②史料館収蔵文書との関連を探討して史料群の全体的な構造を把握すること、③これまでの研究は地主経営の面を重点的に分析してきたので、その他の面も積極的に解明すること、④山田家周辺に残されている諸分家文書、東江部村文書、代官所関係(郡中代などを含む)文書など関連史料群の調査・整理・分析を行うこと、などがある。現地にある山田家文書の総量は数千点に及ぶと見られ、右のような調査を進めるには時間も人員も要する。中野市や地域の研究者と連携し、十分な討議を重ねつつ進めていくことが不可欠であると考えている。

(山崎圭)

# 平成十年度 新収史料紹介

④はマイクロフィルムによる収集を示す。

## 〔註〕武蔵国江戸室町一丁目 ⑤ 荻原家文書

本文書群は、寄託者である荻原通弘氏に伝存していた文書群である。荻原家は近世に江戸室町一丁目に住し、明治二〇年代には通式丁目に移住していた。幕末期の当主は伊兵衛といた。この伊兵衛は、弘化四年に神田明神祭礼の当役であった可能性がある（史料3）。現段階では月行事に就任した形跡はなく、また所蔵者の方にもそうした伝承はない。

その内容は以下の四つに分かれる。一つは日本橋近辺で行われていた肴市場に関する史料である。史料1—1は、肴売人一二組一〇四名がおそらくは室町一丁目にあてて差し出した市の売場所使用に関する取り決め証文であり、末尾に一〇四名の連印がある。史料1—2および史料1—3は、肴売人の連記のみの文書である。史料2は、室町一丁目の南西に隣接する品川町裏河岸に関する史料であるが、これは史料1の文書との関連で本文書群に存在するものと推定される。

第二は、祭礼に関する文書である。神田明神祭礼の一点（史料3）は弘

## ⑥ 石見国浜田蛭子町 和久屋俵家文書

化四年の町触であるが、末尾にこの町触の伝達に関する追筆がある。山王祭礼に関する一点（史料4）は、祭礼掛行事からの文書であり、この時の祭礼の様子が詳細に判明する。

第三は、明治期の文書である。明治初年の小区年寄町用掛の勤務規定（史料5）、また通式丁目の共同給水申し合わせ書（史料9）がある。

最後は荻原家の経営文書三点である。年代はいずれも明治期であり、貸地経営に関する史料が二点（史料6・7）と、金銭出入帳が一点ある（史料8）。金銭出入帳は綴じが外され、各丁は紙背を表にしているものが多い。紙背文書には室町一丁目の土地所有に関する文書が多数見られる。

以上のように、点数は少ないながらも、町方文書が多くは現存していない江戸においては当文書群は非常に貴重である。近年の都市史研究で注目されている市や祭礼に関する史料を含んでいることが特筆されるであろう。また、金銭出入帳の紙背文書を分析すれば、出所の歴史やこの地域の土地所有に関してより豊富な情報を引き出すことができる可能性もある。広範な利用が期待される。

## ⑦ 山城国京都堀之上町万屋 小堀家文書（一）

本文書群は、浜田藩五万石の城下町浜田の大年寄を勤めていた浜田家を所とする。浜田の大年寄は、八つの町人町と四つの浦を管轄する惣町レベルの町役人である。また、俵家は居住している蛭子町の町年寄も勤めていた。さらに、和久屋という屋号で酒造業も経営していた。

以上の俵家の活動に対応して、俵家文書は以下の三つのサブグループによって構成されている。第一は大

年寄の職務により授受作成した文書であり、近世後期の「役用帳」といういわば公用日記が連続して残されている。そのほか、一紙ものの町触が多い。なかでも、町方役所から町大年寄に宛てられた町触は、いずれも薄黄色の切紙に折封が糊付けされているという共通の形式を持っている。寺社に関する書上など上申文書も多い。町年寄関係では、役用日記が数冊あるほか宗門改帳やその関連文書が目につく。借家請状もある。

俵家の家文書としては酒造鑑札をはじめとする酒造関係の文書がある。（現蔵者「依利之氏、撮影収録点数三〇二点、一三リール、七四五〇コマ）

東洋経済大学図書館には、小堀家文書二〇三点を所蔵している。受け入れにあたり小堀家文書を調査した村上勝彦氏の報告によれば、本文書群は一九八〇年四月に飛騨高山の古物商郷倉より購入したもので、当館が所蔵する山城国京都堀之上町万屋小堀家文書と本来は同一出所の史料群であることが明らかにされている（東京経済大学図書館編「小堀家文書目録」一九八五年）。

江戸期両替商関係の史料は現存するものが少ない。そのなかで、当小堀家文書は創業期の明和八年（一七七二）から明治初年までの決算帳簿がほぼ毎年分残されている。当館所蔵史料とあわせて利用することで、江戸中期から幕末維新期の金融活動の研究の進展が期待される。

今回の調査では、勘定帳二一冊、競視記四冊、大福帳四冊を中心に、金銭出入帳等の史料一九四点を収集した。残る史料についても、引き続き次年度に収集予定である。

（現蔵者「東京経済大学図書館、所蔵場所「国分寺市南町一丁目七番地、撮影点数一九四点、一〇リール、五五六〇コマ）



⑤ 山城国京都堀之上町万屋  
小堀家文書(2)

小堀家はもと近江彦根の出身で、初代甚兵衛が宝暦一二年(一七六二)に京都六角高倉通りで両替商を創業した。現在のご当主甚一氏は、その八代目にあたる。調査では、小堀家が所蔵する永代過去帳、家系図など一二点を撮影した。これらの文書は、上蓋に「過去帳入箱」と墨書された桐箱に収められている。小堀家では、過去帳の他に経営帳簿などの史料は一切所蔵されていないという。

現在、小堀家旧蔵の経営帳簿などは、東京経済大学図書館、および当館の所蔵が確認されている。それらの史料の利用にあたり、小堀家の家系に関する情報は不可欠である。当館所蔵史料、および東京経済大学図書館所蔵史料の中に、小堀家の家系を知ることができる史料は一切含まれていないため、今回の調査により家系関係の史料が収集できたことで小堀家文書のよりよい利用環境が整えられたことになろう。

調査にあたり、史料撮影を快諾いただいたご当主小堀甚一氏には、心より深甚の謝意を申し上げたい。(現蔵者〓小堀甚一氏、一二点、一リール、四〇八コマ)。

⑥ 伊豆国田方郡  
葦山江川家文書

江川家は近世中期以降代々幕府代官を勤めた家として知られている。同家には近世中期から幕末・維新时期にかけての代官文書が大量に伝来しており、幕府代官文書としては屈指のものである。代官研究をはじめ、江川代官支配下地域の研究を進める上でも貴重な史料である。

当館では、昭和四二年度に五四リールの文書を撮影し、さらに昭和六三年、平成元・二・九年の各年度に、都合二二リールを追加撮影してきた。しかし、明治初期のものを含め重要なものが少なくない。よって平成九年度に引き続き収集を実施した。収集史料の内容は多岐にわたるが、三島・箱根・吉原宿などの宿助成、御林・並木関係、海防・台場築造・造船関係、無宿・廻米などをはじめとする代官関係文書と、江川家の財政に関する史料「御蔵米御勘定帳」などである。なお、同文書の閲覧には江川文庫の許可を必要とするので、事前にご連絡いただきたい。

(現蔵者〓江川文庫、静岡県田方郡葦山町葦山、電話〇五五九四一九一〇〇二、撮影史料点数一八八点、一リール、六二二五コマ)

⑦ 飛騨国大野郡高山町  
高山町会所・戸長役場文書

今年度は史料保存箱の一九三箱、一四一箱までは全点を撮影し、一四三箱と一四四箱の途中までは高山町発足後の史料であるので、戸長役場史料の参考として選択して撮影した。

一三九箱は勲業関係書類であり、「料理店飲食店申合規則」(明治一五年)、「金融商況運輸重要移出品状況物価移入移出」(明治一〇〇大正八年)などがある。

一四〇箱は社寺関係史料であり、明治五〇八年の高山町町内の寺院の「上地田畑屋敷絵図面并小前帳」、一二年調「社寺明細帳」、明治五〇二年の「社寺」綴などがある。

一四一箱は災害救助関係書類であり、明治五〇大正一〇年「火災洪水及其予防救助」、「保安史料」、「建築請負届」、「経済節儉方御規約」、明治一六〇二一年「飛騨国集談会関係書類」などがある。

一四三箱は二二年の「高山町発足の状」、「憲法発布議院式祝賀」など、一四六箱は明治二二〇四二二年「高山町役場日誌」一九冊を撮影した。

(現蔵者〓高山市郷土館、岐阜県高山市上一之町七五番地、撮影点数七六件、一四リール、八二三七コマ)

受贈図書

平成九年度(二) つづき

行政資料目録 追録第5号(鳥取県立公文所館)
鳥取県公文書簿冊目録 第1集(鳥取県立公文所館)
鳥取藩政資料目録(鳥取県立博物館)
古文书簿冊目録(鳥根県)
鳥取県立文書館所蔵資料目録 第21集(鳥取県立文書館)
鳥取市行政資料目録 市政資料編追録 11(鳥取市公文書館)
瀬戸内海に関する図書総合目録(方言の部)(俳句雑誌の部)(瀬戸内海関係資料連絡会議)
鳥取県立文書館所蔵文書目録 第4集(鳥取県立文書館)
山口県文書館地方調査員調査報告24(山口県文書館)
山口県文書館所蔵行政文書目録 1910・1920年代完結簿冊文書(山口県文書館)
山口県文書館諸家文書目録4(山口県文書館)
香川県立文書館所蔵公文書簿冊目録 第1集(香川県立文書館)

1998年度（通算第44回）史料管理学研修会修了者一覽

〔長期研修課程〕

名 前	レポ ー ト 題 目
秋 山 淳 子 (お茶の水女子大学大学院)	日本人と「満州国」関係史料-中国東北部の「満州国」関係史料の調査と利用・保存-
石 川 一 也 (学習院大学大学院)	和学講談所における「御用留」の書誌的検討
高 山 慶 子 (お茶の水女子大学大学院)	『寛永録』の「記録史的科学的分析」
野 尻 泰 弘 (学習院大学大学院)	鯖江藩大庄屋「御用日記留」の史料学的分析-鯖江藩乙坂組千秋家を素材に-
方 美 英 (お茶の水女子大学大学院)	『大坂本屋仲間記録』にみられる本屋仲間の文書作成・管理
丸 山 猶 計 (東京学芸大学大学院)	書状の執筆に関する一考察
神 田 竜 也	「『文書館』」についてのアンケート」の実施結果について

名 前	レポ ー ト 題 目
山 口 祐 貴 子 (南山大学図書館)	南山大学における記録文書の構造と文書管理の在り方について
安 部 弘 明 (立正大学科目等履修生)	島原藩橋津組大庄屋日記の史料学的考察
小 林 勝 美 (徳島県立図書館)	徳島県立図書館における公文書公開への道程
小 田 大 道 (熊本市立熊本博物館)	熊本博物館の現状・課題及び熊本市の史料管理について-図書館・史料館への展望に向けて-
内 海 和 美 (国立国会図書館)	国立国会図書館憲政資料室におけるプライバシーと資料利用制限措置に関する一考察
飯 野 敦 子 (飯野八幡宮 飯野文庫)	歴史史料の電子化について-敦賀短期大学多仁研究室の事例-
長 野 栄 俊 (福井県立図書館)	図書館の史料保存利用機関としての可能性

〔短期研修課程〕

名 前	レポ ー ト 題 目
田 中 聡 (新潟県立図書館)	佐渡地区における資料所在調査-住民参加型調査の提案-
小 貫 隆 久 (栃木県立図書館)	栃木県立図書館における資料保存活動とその課題
御 厨 義 道 (香川県教育委員会歴史博物館建設準備室)	史料のあり方についての一考察-諏訪家史料調査を通じて-
山 崎 朗 史 (立正佼成会中央学術研究所)	史料認識論から見た教祖史料への一考察
高 野 茂 (熊本県立図書館)	熊本県の古文書調査について
菅 修 一 (京都大学経済学部)	近代日本教育史料としての教科書について
忽 那 一 代 (京都大学附属図書館)	貴重資料の保存と電子化
磯 部 よ し 子 (国立国語研究所)	「研究情報資料データベース」への史料管理学の活用
内 村 奈 緒 美 (東京大学史料編さん所)	所蔵史料目録データベースの構築と公開について-現状と課題-
大 久 保 美 玲 (昭和女子大学大学院)	昭和女子大学唐招提寺古文書調査室の史料整理・管理方法とその課題
吉 井 隆 雄 (古代歴史記念美術館)	保存と劣化に関する一考察
河 西 珠 実 (古代歴史記念美術館)	史料管理学研修会に参加させて頂いての(緒)感
宮 田 克 成 (泉佐野市教育委員会)	書籍史料調査の現状から史料保存を考える
伊 藤 一 晴 (山口県立図書館)	山口県立図書館における行政文書の収集及び評価・選別について
伊 東 謙 助 (静岡県教育委員会)	県史編さん収集資料の利用と普及活動
仲 地 政 光 (北谷町立図書館)	北谷町立図書館の現状と問題点及び今後の課題と対策
吉 田 時 代 (都留文科大学附属図書館)	「史料管理学研修会-短期研修課程-」を受講して

名 前	レポ ー ト 題 目
小 林 啓 子 (都留文科大学附属図書館)	史料館と図書館の利用・保存の一考察
高 久 智 広 (神戸市立博物館)	旗本家文書の成立過程について-旗本本多家史料の性格とその構造-(試案)
佐 野 史 子 (八千代町教育委員会)	八千代町歴史民俗資料館における史料の保存環境-その現状と対策-
小 林 和 香 (安芸市立歴史民俗資料館)	安芸市におけるファイリングシステム導入と公文書保存
藤 田 有 紀 (財)土佐内家室物資料館)	土佐藩における文書整理・保管について
木 下 達 哉 (高知市立自由民権記念館)	水害時における行政文書の保存活動-平成10年高知市立大水害時における高知市大津支所の行政資料の普及活動を事例に-
廣 田 京 子 (東京大学工学部電気系図書館)	明治期の卒業論文及び実習報告書の保存と電子化
千 代 川 徳 子 (神奈川県立公文書館)	神奈川県立公文書館における展示業務の現状とその問題
畑 国 和 (神奈川県立公文書館)	神奈川県立公文書館の現状と当面する課題
大 津 祐 司 (大分県立先哲史料館)	大分県立先哲史料館の地域史料保存活動
山 口 俊 浩 (東京芸術大学大学院)	田宮内省技師・中里清四郎建築設計資料の分析と評価-東京芸術大学大学美術館所蔵資料からの考察-
山 田 明 日 香 (実践女子大学)	実践女子大学文学部芸文資料研究所における紙焼本の整理について
本 馬 貞 夫 (長崎県立長崎図書館)	県立長崎図書館郷土資料の将来構想
衛 藤 彩 子 (神戸女子大学大学院)	西宮市立郷土資料館における文書整理作業の現状と問題点
澤 山 孝 子 (三重県生活部文化課)	三重県史編さん室における現在の調査方法とその課題について

# 受贈図書

平成九年度 (二) つづき

歴史博物館整備に伴う収蔵資料目録

平成5・6・7年度(香川県教育委員会)

川北文書目録(安芸市教育委員会)

収蔵品目録11(福岡市博物館)

福岡県公共図書館郷土資料総合目録

追録8(平成8年度版)(福岡県立図書館)

九州大学文学史料室所蔵写真目録

九州帝国大学時代(九州大学文学史料室)

檜垣文庫目録(中世編、近世豊前国・筑後国編、近世筑前国編、近代福岡縣編、佐賀縣編、和装本編)(九州大学附属図書館六本松分館)

小郡市史編集委員会所蔵 資料総目録

第一〜三集(小郡市史編集委員会)

御勢大霊石神社・内村家文庫和漢書目録(小郡市史編集委員会)

「嶋井家資料」目録(福岡市博物館)

巖原町資料館所蔵古典籍目録(巖原町教育委員会)

熊本関係古文書目録 近世編(熊本県企画開発部文化企画課)

熊本県郷土人物文献目録(熊本県立図書館)

「稲葉家文書」目録(大分県立先哲史料館)

明石家寄贈明石秋室関係資料目録(佐伯市教育委員会)

宮崎市行政資料目録(5)、(追録6)

〔宮崎市〕

北海道立文書館資料集 第12(北海道立文書館)

新修釧路市史 第4巻資料編(釧路市史編さん員会)

釧路叢書第32巻(釧路叢書編纂事務局)

新旭川市史第8巻(旭川市史編集会議)

新札幌市史第4巻(札幌市教育委員会)

函館市史 通説編3巻(函館市史)

上磯町史(通史編)上・下巻(上磯町)

上磯町年表(上磯町史研究会)

新編弘前市史 資料編4(弘前市)

五所川原市史 史料編3下巻(五所川原市)

和賀町文化財調査報告書 第25・27集

古文書解説編(北上市教育委員会)

気仙沼市史V産業編(下)(気仙沼市史編さん委員会)

仙台市史資料編3、3別冊、特別編4(仙台市)

鹿角市史 第5巻(鹿角市)

佐竹南家御日記 第2巻(湯沢市教育委員会)

渡江和光日記 第2巻(秋田県公文書館)

米沢市史 第1巻(米沢市史編さん委員会)

寒河江市史編纂叢書 第53・55集(寒河江市史編纂委員会)

新庄市史編集資料集 第26巻(新庄市教育委員会)

二本松市史 7(二本松市)

西会津町史 第5巻(上)、別巻2(西会津町史編さん室)

福島市史史料叢書 第69・70輯(福島市教育委員会)

茨城大学附属図書館郷土史料叢書 1

太田市史 通史編中世(太田市)

新編高崎市史 史料編6(高崎市市史編さん委員会)

幸手市史 民俗編(幸手市教育委員会)

新修蔵市史 資料編1〜3、通史編(蔵市)

市政施行30周年記念 あさかの歴史(朝霞市教育委員会)

埼玉県史料叢書3(埼玉県教育委員会)

所沢市史調査資料36(所沢市文化財保護課)

鳩ヶ谷市の古文書 第21集(鳩ヶ谷市文化財保護委員会)

都幾川村史資料 3、5(3)、5(4)(都幾川村)

名前	レポート題目
小川 正人 (北海道立アイヌ民族文化研究センター)	北海道立アイヌ民族文化研究センター所蔵「山田秀三文庫」文書資料の整理と目録編成について
水森 直美 (学習院大学大学院)	収蔵庫の立地と周辺環境について-オカダングムシにみるその関係-
小野 崎 尊和 (立正大学大学院)	神奈川県大井町の町史編さんとその問題
山崎 礼子 (大和市教育委員会)	大和市つる舞の里歴史資料館における記録史料管理-下鶴間村公所古木家文書を題材として-
橋本 道範 (滋賀県立琵琶湖博物館)	滋賀県における歴史資料基本台帳の作成と運用にむけて

名前	レポート題目
久部 恵子 (神戸大学附属図書館)	神戸大学附属図書館における特殊資料の電子化について
三浦 龍一 (札幌市中央図書館)	北方型保存施設の環境リスク 低湿度環境がもたらす紙繊維の劣化をめぐる一考察
徳江 さやか (恵泉女学園本部史料室)	恵泉女学園史料室の歩みと、今後の課題
松尾 研一 (福岡県立図書館)	福岡県立図書館における古文書資料の現状と課題および冊子体目録について
五十嵐 千秋 (東京学芸大学附属図書館)	東京学芸大学附属図書館所蔵松浦文庫再考
佐藤 隆 (秋田県公文書館)	秋田県公文書館の古文書課所蔵史料の再整理と目録刊行について-絵図史料の整理と絵図目録刊行に関連して-

# 彙報

## ○史料の収集

本年度は、武蔵国江戸室町一丁目荻原家文書を受託し、またマイクロフィルムにより、飛騨国大野郡高山町会所・戸長役場文書、伊豆国田方郡韭山川家文書、石見国浜田蛭子町和久屋俵家文書、山城国京都小堀家文書を収集した。概要は、本号「新収史料紹介」を参照のこと。

## ○所蔵史料の保存のためのマイクロ化

所蔵史料の利用による劣化・損傷を予防し、よりよい保存管理と利用の効率化を図るため、当館所蔵史料のマイクロ化事業を進めた。今年度は、自館原本「信濃国松代真田家文書」の内、日記類を一〇冊、当館所蔵史料を他機関が既に文書群全体をマイクロ化したものからのデュープフィルムの作成として「阿波国徳島蜂須賀家文書」三一六リール分を行った。

## ○史料の所在調査

本年度は、阿波国徳島蜂須賀家文書の関連史料、信濃国高井郡東江部村山田家文書（以上の詳細は本号「史料所在調査報告」を参照のこと）、飛騨国大野郡高山町会所・戸長役場文書について実施した。

## ○史料館所蔵史料目録作成のための調査

史料目録第六八集作成のため、京都教育大学、金沢市立図書館等を対象に調査を行った（一月三日～六日、福田千鶴）。

## ○史料保存機関事務連絡および調査

山口県文書館、山口大学附属図書館で実施した（二月一日～三日、吉岡栄美子）。

## ○運営協議会と評議員会の開催

一九九八年六月三〇日、一月一六日、一九九九年一月二九日、二月二二日に運営協議員会が、一九九八年七月二三日、一九九九年三月二日に評議員会がそれぞれ開催され、管理運営について評議ないし協議された。

## ○評議員の退任と新任（敬称略）

退任（本年六月三十日）  
石井進（国立歴史民俗博物館元館長）  
佐々木高明（国立民族学博物館元館長）  
尾藤正英（川村学園女子大学教授）  
新任（本年七月一日）  
石毛直道（国立民族学博物館館長）  
大口勇次郎（お茶の水女子大学教授）  
佐原眞（国立歴史民俗博物館館長）  
○運営協議員の新任と退任（敬称略）  
退任（本年七月三十一日）  
大口勇次郎（同前）  
新任（本年八月一日）

## 宮地正人（東京大学史料編纂所教授）出版物の刊行

1 「史料館所蔵史料目録」第六八集として「山城国諸家文書目録（その二）」（担当福田千鶴）を刊行した。  
2 「史料館研究紀要」第三〇号を刊行した。内容は次の通り。

- ・日本史料情報電子化における課題
  - ・松浦家文書の戦時疎開について
- 永村 眞  
話し手 松浦一雄  
聞き手 鈴江英一

・直輸出蚕種業者のミラノ通信  
井木 幸男

・「本朝通鑑」編修と史料収集―対朝廷・武家の場合― 藤實 久美子  
〔平成九年度共同研究〕近世の農民・自然・年貢制度

・序文 フィリップ・C・ブラウン  
・割地制度―外から見た面白さ、中から見た複雑さ  
フィリップ・C・ブラウン  
・割地制と地租改正―所持（所有）・進退― 青野 春水  
・越後南部農村の頼母子講と農業経営 松永 靖夫  
・近世の「地主制」と質地慣行―越後国頸城郡岩手村佐藤家を事例として 舟橋 明宏

・文書館活動と情報資源化の構想―古

## 文書整理からの展開―

大友一雄・五島敏芳

・史料収蔵環境に対する保存箱の効果  
青木 睦

3 「史料館報」第六九号および第七〇号（本号）を刊行した。なお次号は本年九月刊行予定。

4 史料叢書第三巻「町村制の発足」（担当鈴江英一、名著出版）を刊行した。  
5 セミナー原典を読むⅡ「夜明け前」の世界―「大黒屋日記」を読む―  
（高木俊輔著、平凡社）を刊行した。

○一九九八年度史料管理理学研修会修了証書の授与

所定の教科目を履修し、レポート審査に合格した受講生に修了証書を授与した。詳細は本号「一九九八年度史料管理理学研修会修了者一覧」を参照のこと。

○「記録史料の情報資源化と史料管理学の体系化に関する研究」の研究會  
右の研究について、部会長会議および研究会を当館で開催した。詳細は本号活動報告を参照。

## ○館内研究会

「二八七回」十一月二七日  
「山城国諸家文書目録（その二）」第六八集の構成について 福田千鶴  
「二八八回」十一月十九日  
「歴史史料の材質劣化評価への化学発光の応用研究」の研究會（詳細は本号活

動報告を参照)

〔二八九回〕二月二六日

情報システム・プロジェクト中間報告

〔二九〇回〕二月二二日

韓国における史料保存と国史編纂委員会の活動

韓国国史編纂委員会

編史研究士 田美姫

〔二九一回〕二月二三日

宗門人別送り状の成立をめぐる

史料館リサーチアシスタント(学習院大学大学院)

五島敏芳

〔二九二回〕三月一六日

国際科調査報告

〔二九三回〕三月二九日

史料テキストDB構築の手法 永村眞

○大学院教育協力(特別共同利用研究員)

長期研修

秋山淳子(お茶の水女子大学大学院)

石川一也(学習院大学大学院)

高山慶子(お茶の水女子大学大学院)

野尻泰弘(学習院大学大学院)

方美英(お茶の水女子大学大学院)

通年

青木祐一(千葉大学大学院)

宮原一郎(國學院大学大学院)

○海外出張

・福田千鶴が、文部省科学研究費補助

金(国際学術研究)「米国議会図書館所

蔵の日本古典籍の調査・研究及び目録

の作成」(研究代表者渡辺憲司)に基づ

いて、八月二七日から九月五日まで米

国議会図書館(ワシントン)において調

査・研究を行った。

・安藤正人が、一〇月二六日から一一

月二日まで「アーキビスト養成国際シン

ポジウム」(国際文書館評議会専門職教

育養成部会主催)出席のため、サラマン

カ大学(スペイン)に出張した。

・渡辺浩一が、文部省科学研究費・基

盤研究A2「日本型伝統都市類型の社

会」空間構造に関する基盤的研究」(研

究代表者吉田伸之)により、一九九八

年一月一〜五日に、ソウル市立大学

ソウル学研究所・ソウル大学国史研究

室・同大学建築史研究室を訪問して都

市史に関する研究交流を行った。

○名誉教授称号の授与

前史料館長森安彦氏は、平成一〇年七

月二三日付で国文学研究資料館名誉教

授称号を授与された。

○博士(歴史学)学位の授与

史料館助手山崎圭は、学位請求論文

「日本近世における村・地域の構造と運

営に関する研究」で名古屋大学より平

成一〇年一〇月三〇日付で博士(歴史

学)の学位を授与された。

○史料館研究・教育活動一覽(一九九

八年発表のもの。ただし大学出講は一九

九八年度)

高木俊輔

・著書『夜明け前』の世界―大黒屋日

記』を読む―(平凡社二〇月五日)

・論文「農民日記史料論二―大黒屋

日記(年内諸事日記帳)にみる地名

・人名記事について」(史料館研

究紀要)二九号、三月)

・論文「明治三年戸籍について」(松本

市史研究)八号、松本市 三月)

・論文「草莽の志士」(朝日新聞社アエ

ラムック『幕末学のみかた』四月)

・論文「農民日記史料の可能性」(駒沢

大学大学院史学会「史学論集」二八、

四月三〇日)

・論文「五つの『偽官軍事件』」(歴史

読本)一二月)

・共編「松本藩士の日記」(松本市史

近世部門調査研究報告書)第五集、

松本市 三月)

・大学出講 立正大学文学部「日本史

特講」

・大学出講 愛知大学文学部「日本史

特殊講義」集中 九月

鈴江英一

・論文「市町村役場文書における目録

記述の試み―近現代史料整理論ノ一

トII」(史料館研究紀要)第二九

号、二月)

・論文「公立文書館の方向と課題―公

文書館法成立一〇年の年に」(兵

庫島の歴史」第三四号、三月)

・論文「北海道区制、一、二級町村制

の成立過程―一八九〇年代の諸提議

と構想を中心に」(永井秀夫編「近

代日本と北海道」、四月)

・書評「高橋実著『文書館運動の周辺』

ほか」(古文书研究)第四七号、四月)

・講演記録「廻浦と開拓―維新前後北

海道の史料事情」(国文学研究資料

館編「詩人杉浦梅潭とその時代」、二

月)

・報告「切支丹禁制高札撤去後の禁教

政策」(キリスト教史学会大会、一〇

月一日)

・報告「切支丹禁制高札撤去後の禁教

政策・再論」(プロテスタント史研究

会、一二月五日)

・講義「文書館における公文書の評価

と選別について」(埼玉県立文書館文

書史料取扱講習会、二月二日、浦和

市)

・講演「古文書もかつて皆、現代の文

書―近現代史料の保存のために」

(和歌山県立文書館地域史料保存調

査員会議、一〇月二九日、和歌山市)

・講義「資料整理論」(国立公文書館公

文書館専門職員養成課程、一二月一

日、東京都)

山田哲好

・編著「松代藩庁と記録」―松代藩

「日記練出」—(史料叢書2)(国文学研究資料館史料館編、名著出版、三月)

・書評「埼玉県地域史料保存活用連絡協議会編『地域文書館の設立に向けて5—地域史料の検索と活用—』」(『記録と史料』九、一〇月)

・報告「松代藩の記録管理」—「史料叢書2 松代藩序と記録」の刊行を終えて—(文書管理史研究会、九月五日、埼玉県立文書館)

・報告「松代藩の記録管理」(品川古文書研究会月例研究会、一〇月二八日)

・報告「史料所在情報データベース」(第四回シンポジウムコンピュータ国文学、一二月三日、国文学研究資料館)

・大学出講 立正大学 博物館実習(記録史料の調査・収集・整理・保存・管理と利用)

### 福田千鶴

・論文「近世前期大名相続の実態に関する基礎的研究」(『史料館研究紀要』二九号、三月)

・論文「幕藩政治史上の越後騒動」(『上越市史研究』三三号、三月)

・論文「寛永期における主君・家中・親族・公儀」(丸山雍成編『日本近世の地域社会論』文献出版、一一月)

・小論文「中継将軍だった綱吉」(アエ

ラムック「元禄時代がわかる」、朝日新聞社、一二月)

・研究ノート「大名史料の成立と構造」(国文学研究資料館史料館「特定研究」記録史料の情報資源化と史料管理学の体系化に関する研究)研究レポート第二号、三月)

・研究ノート「幕府勘定所と代官所—勘定系「伺書」のライフサイクルをめぐって—」(研究成果報告書「幕藩領主文書と村方・町方文書群の発生・展開並びに伝存に関する史料学的研究」、三月)

・書評「大石学著『享保改革の地域政策』」(『関東近世史研究』四三三号、七月)

・書評「笠谷和比古著『近世武家文書の研究』」(『記録と史料』九号、一〇月)

・報告「織豊期の終焉—豊臣秀頼論—」(五月二八日、名古屋織豊期研究会・同近世史研究会)

・報告「歴史学研究会大会報告小池進報告批判」(七月一日、歴史学研究会近世史部会)

・報告「近世史料論の再構築」(一二月四日、九州大学比較社会文化研究科地域資料情報講座第二回歴史学討論会「日本近世史料論の今日的課題」)

・研究助成 平成十年度稲盛財団助成金「京都尼寺門跡の基礎的研究—宝

鏡寺文書群の調査・分析を中心に—」丑木幸男

・編著「上野国寺院明細帳」第八巻、補遺・総索引(群馬県文化事業振興会、六月三〇日)

・編著「高津仲次郎日記」第一巻(群馬県文化事業振興会、一一月三〇日)

・紹介「群馬県地方史研究の動向」(『信濃』五八一号、信濃史学会、六月一日)

・報告「北関東における二つの研究会と三つの自治体史」(首都圏形勢史研究会会報)第八号、九月一〇日)

・短文「アーキビスト」(『学術月報』五巻五号、通巻六四二号、日本学術振興会、五月一五日)

・講演「戸長役場史料論」(歴史人類学会大会、一〇月二四日、筑波大学)

・報告「国立公文書館専門職養成課程とアーキビスト養成の課題」(日本歴史学協会シンポジウム、一二月一日、早稲田大学)

・論文「近世都市における文書保管と文書類型—城下町久保田における個別町の「永代帳」について」(丸山雍成編『日本近世の地域社会論』一一月、文献出版)

・研究ノート「近世都市高山における町方文書の保管構造」(研究成果報告書

「幕藩領主文書と村方・町方文書群の発生展開並びに伝存に関する史料学的研究」三月)

・再録「近世都市における宝蔵と文書」(『管理』—播州三木町を事例として—)(『三木史談』四〇号、七月)

・紹介「三浦徹「イスラームの都市世界」」(都市史研究会編『年報都市史研究』7号、一〇月、山川出版社)

・大学院演習「近世都市史の研究」(国文学研究資料館特別共同利用研究員制度)

### 青木 睦

・日録「史料館所蔵史料日録 第六七集越後国三島郡深沢村高頭家文書日録」(史料館、三月)

・小論「高山町年寄文書の保管容器について」(『幕藩領主文書と村方・町方文書群の発生・展開並びに伝存に関する史料学的研究』史料館、三月)

・小論「古文書保存の基本」(『古文書通信』第三八号、八月)

・報告録「文書館における殺虫・殺菌の実態と問題点」(文書館における保存修復専門職を考える—ICOMの「Conservator-Restor」その職業定義について—をもとに)(史料館「記録史料の情報資源化と史料管理学の体系化に関する研究」研究レポートNo.

2、三月)



- ・ 講義「紙史料保存の理論と実務―二世紀をむかえるにあたっての史料保存」(第一回史料管理セミナー 企業史料協議会主催、六月二十九日)
- ・ 報告「近世における史料保存管理について―寺院史料を中心に」(文書管理研究会、九月五日)
- ・ 報告「民事判決原本の保存管理の現状と課題」(「法と裁判」近代化研究会、一〇月二十四日)
- ・ 報告「歴史史料の劣化評価への化学発光の応用に関する現状と課題―江戸幕府発給文書を中心に」(CL研究会、二月一日)
- ・ 大学出講「学習院大学総合講座」(記録保存と現代)(分担講義、一二月)
- ・ 大学出講「千葉大学文学部史学科」(「文書館学 a」)
- ・ 科研基盤(c)「史料に用いられた紙資料群の科学的類別に関する研究」
- 安藤正人
  - ・ 著書「草の根文書館の思想」(岩田書院、一九九八年五月)
  - ・ 著書「記録史料学と現代―アーカイブズの科学をめざして」(吉川弘文館、一九九八年六月)
  - ・ 注釈・監修「本渡市古文書史料集 天領天草大庄屋木山家文書 御用触写帳」第三卷(本渡市教育委員会、一九九八年三月)
- ・ 研究ノート「Encoded Archival Description (EAD)―記録史料日録情報の電子化、PROの試み」(国文学研究資料館史料館「記録史料の情報資源化と史料管理学の体系化に関する研究」研究レポート)第二号、一九九八年三月)
- ・ 評論「アーキビスト養成大学院を早急に―「歴史情報後進国」日本―」(「学術月報」第六四七号、一九九八年一〇月)
- ・ 講義「企業アーカイブズの意義とアーキビスト」(企業史料協議会ビジネス・アーキビスト・セミナー、二月二日、厚生会館、東京)
- ・ 講演「史料書誌情報の標準化―これまでの試みと現状―」(国立国会図書館政治史料連絡会議、三月一六日、国立国会図書館、東京)
- ・ 報告「松江藩郡奉行所「裁判記録」の史料学的研究」(文書管理史研究会、四月二五日、埼玉県立文書館、浦和)
- ・ 報告「アジアにおけるアーカイブズの現状と国際協力」(「アジアにおける歴史的な文書史料の修復保存総合調査」報告会、五月二〇日、国際交流基金アジアセンター、東京)
- ・ 講演「文書管理システムの整備と歴史的な文書の保存―理念から実践へ―」(日本銀行講演会、九月一六日、日本銀行金融研究所、東京)
- ・ 講義「A challenge to archival development and archive science in Japan (日本におけるアーカイブズの発展と記録史料学の課題)」(マルブルク文書館学院特別講義、九月二三日、マルブルク、ドイツ)
- ・ 報告「Archive science and archival education in Japan (日本における記録史料学研究とアーキビスト教育)」(ICA/SAE, 9th International Symposium on Archival Education、一〇月二九日、サラマンカ大学、サラマンカ、スペイン)
- ・ 講義「専門職員論」(公文書館専門職員養成課程、一二月八日、国立公文書館、東京)
- ・ 大学出講(分担)「学習院大学総合講座」(記録保存と現代)(一九九八年四月―一九九九年三月)
- ・ 研究助成(分担)「国際交流基金アジアセンター助成プロジェクト」(アジアにおける歴史的な文書史料の修復保存総合調査)(一九九八年三月三日―八月、インドネシア、マレーシア調査)
- 大友一雄
  - ・ 論文「天保期のいわゆる「入返し金」について」(「歴史と地理」五一号、三月二〇日)
  - ・ 小論「御鷹の餌鳥請負人願書」(「古
- 文書の研究」五六号、日正社古文書研究所、一九九八年九月)
- ・ 小論「江戸幕府と五節句」(虎屋文庫展示図録「年中儀礼と和菓子」展、一九九八年一〇月)
- ・ 日録「史料館所蔵史料目録―尾張国海西郡森津新田武田家文書―」第六集(国立史料館、三月二二日)
- ・ 共著「板橋区史」第一章三節近世前期の鷹狩、第五章二節鷹狩の再興と板橋の村々(東京都板橋区、三月)
- ・ 共編「都幾川村史資料」近世編明覚地区一(埼玉県比企郡都幾川村史編纂委員会、三月)
- ・ 講演「関東取締出役と在方餌差」(神奈川県立公文書館、五月二四日)
- ・ 講演「日記に見る武蔵野の幕末」(所沢市中央公民館、八月二八日)
- ・ 報告「大名はいかにして文書を管理したか―文書管理のいま・むかし―」(大分県立先哲史料館、一〇月一八日)
- ・ 講義「文書館活動とコンピューター古文書整理からの展開―」(全史料協同研究会、十一月一日、沖縄県那覇市)
- ・ 講演「江戸幕府と年中行事」(虎屋文庫、一一月二二日)
- ・ 大学院演習「幕府・藩の組織構造と文書群の史料学的研究」(国文学研究資料館特別共同利用研究員制度)
- ・ 大学出講「国学院大学文学部(史料

論

・研究助成 科研基盤研究「近世の国家的祭祀儀礼に関する基礎的研究」(二二年度)

山崎 圭

・書評「田中誠二著『近世の検地と年貢』」(『史学雑誌』二〇七編一、一月)  
・書評「書評 伊藤忠士著『近世領主権力と農民』」(『歴史の理論と教育』一〇二号、一〇月)

・報告「信州幕領における地域支配・運営と請負人」(史学会シンポジウム、十一月一日)

・講義「人口の変遷と村人のあり方」(長野県北御牧村誌連続講座、九月二二日)

永村 眞

・(共編)「図説静岡県史」(静岡県教育委員会、一九九八年三月)

・(共編)「醍醐寺展」図録(日本経済新聞社、一九九八年五月)

・論文「論義と聖教―『忠日古光抄』を素材として―」(速水侑編『院政期の仏教』吉川弘文館、一九九八年二月)

・論文「『聖教』の相承―守覚法親王草「密要鈔」を素材として―」(『醍醐寺文化財研究所紀要』一六号、一九九八年二月)

・論文「日本中世記録史料の編成・目録論―特に寺院史料を素材として―」(特定研究「記録史料の情報資源化と史料館理学の体系化に関する研究」研究報告2号、国文学研究資料館・史料館、一九九八年三月)

・論文「表白・自謙句・番句」(北畠典生博士古稀記念論文集「日本仏教文化論叢」、永田文昌堂、一九九八年六月)

・論文「修法と聖教―大元帥法を通して―」(皆川完二編『古代中世史料学研究』、吉川弘文館、一九九八年一〇月)

・講演「中世における寺院社会と法」(栃木県立文書館古文書研修会(応用コース)、二月十三日、於宇都宮)

・講演「南都の法会」(奈良女子大学連続講演会、三月十四日、於奈良女子大学)

・講演「莊嚴寺不動明王胎内納入文書を読む」(真岡市教育委員主催真岡市歴史教室、六月六日、於真岡市青年婦人会館)

・講義「日本の文化」(京都橘女子大連続講義、六月二十九日、七月十三日、於京都橘女子大学)

・講演「真言密教と聖教」(京都仏教各宗学校連合会主催大藏会講演会、十一月十四日、於京都仁和寺御室会館)

・大学出講 日本女子大学文学部(本務校)、成蹊大学文学部「日本仏教史」、学習院大学文学部「日本史特殊講義」

・執筆「中世菅浦文書について(三)」(滋賀大学経済学部附属史料館「研究紀要」三一、三月)

・論文「菅浦惣村成立の特質」(佐藤和彦編『悪党の中世』岩田書店、三月)

・報告「中世の村と情報」(歴史学研究会大会中世史部会、五月)

・論文「中世の村と情報」(『歴史学研究』七一六号、十月)

・執筆「都幾川村史資料(五) 近世編明覚地区I」(都幾川村、三月)

・共編「江戸幕府役職武鑑編年集成」第四期、卷一九〜二四(東洋書林、四月)

・共編「江戸幕府役職武鑑編年集成」第五期、卷二五〜三〇(二月)

・解説「御当家人年録」と幕府の儒者林家」(児玉幸多編『訳注日本史料御当家人年録』集英社、六月)

・分担執筆「新編千代田区史 通史編・通史資料編」(千代田区、五月)

・小論「江戸の名鑑」(『新日本古典文学大系』月報八六、岩波書店、四月)

◎閲覧業務停止のお知らせ  
蔵書点検の実施にとまない、左記の期間の閲覧業務を停止します。  
四月二二日(木)〜四月三〇日(金)  
閲覧業務再開 五月六日(木)

平成一一年度史料管理学会(通算四五回)の開催予定  
<長期研修課程>  
国文学研究資料館 東京会場  
前期 六月二八日〜七月二三日  
後期 八月三日〜九月二四日  
<短期研修課程>  
秋田市文化会館  
一一月八日〜一一月一九日  
(前・後期、短期とも最後の一週間はレポートの作成にあてる)

史料館報 第七〇号  
平成一二年(一九九九)三月三十一日  
編集兼 国文学研究資料館  
発行者 史料館  
〒四、八五五  
東京都品川区豊町一ノ六ノ〇  
電話〇三三七八五七二三(代)  
FAX〇三三七八五五四五六  
印刷所 東京都台東区寿三ノ一四ノ五  
有限会社 スミダ  
電話〇三(三八四)二七三三三

電話〇三(三八四)二七三三三